

「愛するということ」

使徒行伝 20章 17節～38節

説 教 本庄侑子牧師

パウロはエペソに人を送って、教会の長老たちを呼び寄せました。もうここには戻って来ない、生きて彼らに会うことはないと示されていました。そして実際、これが最後となりました。この時、パウロが語った言葉は書き記され、語り継がれてきました。人を真実に生かす、究極の愛の言葉が詰まっていたからです。

パウロは思い起こさせました。自分は涙を流しながら、試練の中にあっても、伝えるべきことを伝え、教えるべきことを教えてきたと。それは、「あなたがたの益になること」(20節)であり、「神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」(21節)だったと。

「神に対する悔改め」とは、単に悔いることではなく、神様に向かって方向を変えることです。この世界と私たちをお造りになり、愛と目的を持って生かしておられる神様に背を向けて、神様以外の人や物が神であるかのようにして、的外れな方向に向かって生きてきた私たちが、神様のところに帰ること、神様が中心にいて下さる世界の中を、神様と共に新しく生き直すこと、それが悔改めです。

パウロはここに「主イエスに対する信仰」を付け加えています。「神に対する悔改め」は、「主イエスに対する信仰」なしでは起こり得ないからです。主イエスは、私たちの代わりに十字架につけられ、私たちの罪の贖いを成し遂げて復活し、今も生きておられ、私たちを救うために出会って下さるお方です。私たちは、このお方に会っていただくことによって初めて、自分が罪人であることが分かるようになります。そしてまた、この主イエスによって成し遂げられた罪の贖いを信じるからこそ、安心して、喜びと感謝をもって、神様のところに帰ることができるのです。

「だから今日、この日にあなた方に断言しておく。私は全ての人の血について何ら責任がない。神の御旨を皆余すところなくあなた方に伝えておいたからである。」(26節)一見、冷たく聞こえるかもしれませんが、しかし、これこそが究極の愛の言葉です。大事なものは、パウロではなく、パウロが語り尽くした「神に対する悔改め」と「主イエスに対する信仰」であり、パウロと彼らとの関係ではなく、彼らと主との関係だからです。福音には、人を主イエスに出会わせ、罪に気づかせ、神に対する悔改めに至らせ

る力がある。そう確信し、語るべきことを語り、あとは主に委ねること。それが、人を真実に愛するということです。

パウロはさらに、長老たちに、まず自分自身に気をつけ、群れ全体に気を配ることを求めました。実際、この後、教会の外から、また彼ら自身の中からも、福音とは異なる考えが入り込んで、教会を荒らしました。これは、今日の私たちにも起きていることです。すぐに役立つような言葉、受け入れやすい言葉、自己実現や自己拡張を助けてくれるような言葉が私たち自身に、教会に入り込んできます。しかしそのような言葉は、結局は人を神様から引き離し、罪と永遠の救いから目をそらさせ、目の前の欲求を満たし、自分に居座ることへと突き動かしていきます。

「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。」(32節)パウロは、目を覚ましていなさい、私が語ってきたことを忘れないでほしい、と訴えながらも、最終的には、主と御言葉の力を信じました。御言葉が人々の心に届き、信仰を立てあげ、神の国を共に継がせる、そのような将来を仰ぎ見ました。

彼らは泣きながら悲しみました。どれほど将来を仰ぎ見たとしても、やはり、地上での別れは悲しかったのです。しかしその中で、彼らは一緒にひざまずいて祈りました。礼拝に、主と共に仰いで祈る所に、永遠の命の交わりが満ちているからです。これが最後となったとしても、永遠に引き離されることがない永遠の命の交わりの中で、彼らは別れていきました。

今日、最後の日となったとしてもそれで良い。必要なことは全て語った。自分を通して語られた福音の言葉が、人を生かし、イエス・キリストに出会わせ、永遠の命の交わりに共に生かしてください。そう心から言える言葉、究極の愛の言葉が、教会に、私たち一人一人に満ちますように。自分自身に対して、教会に連なる一人一人に対して、まだ教会にはいなくとも、心にかかり、祈りに覚えている人たちに対して、まっすぐに語られていきますように。

(記 説教要約奉仕者)